

霞ヶ浦北浦に”コノシロ”が多く見られる!!

1. コノシロ

霞ヶ浦北浦の秋も深まり、10月に入ってから、漁業者の方々や一般市民の皆さんから、「この魚は何ですか?」といった質問が多く寄せられています。

当内水試で調べたところ、「コノシロ」でした。コノシロは海産の魚で、潟沼などの汽水域では普通に見られ、また寿司ネタの「こはだ」として知られる魚です。もっとも、現在霞ヶ浦北浦に多くいるコノシロは、手のひらよりやや小さいくらいのサイズですので、お寿司には無理かもしれません。



(写真:コノシロ)

これに似た魚では、同じく汽水域にも棲む「サツパ」があり、こちらは「ママカリ」として有名です。見分け方は背びれの後端が長く伸びているのがコノシロで、そうでないのがサツパです。

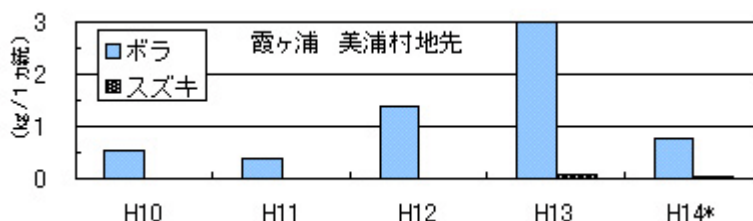
コノシロは、これまでの当内水試での調査では全長20cm程度のものが年に1度見られるくらいでした。長年漁業に携わっている方でも、初めて見るという人も少なくなく、これほどコノシロがまとまって霞ヶ浦北浦に入ったことは初めてと思われます。

2. どうして霞ヶ浦北浦に?

この秋に、コノシロが多く霞ヶ浦北浦に入った原因としては①河口域での発生が多かった②常陸利根川水門から入りやすかった、などが考えられます。①については、今年の夏は小型のコノシロが多かったという海面漁業者の情報があり、これが原因かも知れません。②については、最近の水門操作回数に大きな変化はありませんでした。また、10月1日に関東地方を襲った台風21号通過以前の9月から、コノシロが確認されていましたので、この台風時の水門操作によるものだけではなさそうです。

3. 海産魚類の増加?

霞ヶ浦北浦では、近年ボラやスズキなどの海産魚類が目立つようになってきました(図1)。原因や今後の増減については、まだよく分かっていません。



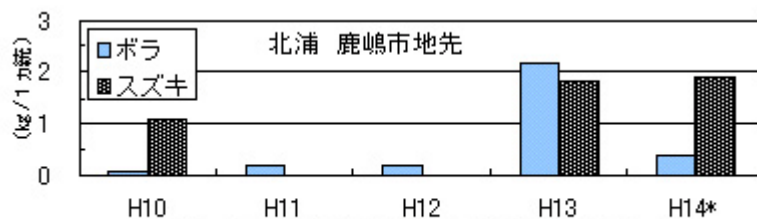


図1 海産魚類の張網入網量(年平均)の推移
*H14は10月までのデータ

海と関係がある魚介類には次のようなものがあります。

海と関係がある魚介類
ウナギ、スズキ、ボラ、マハゼ、コノシロ
モクズガニ、ヤマトシジミ など

水産業としては、ウナギなどは非常に有用な種ですが、一方でボラは刺網では厄介者になったりもします。また、生態系として考えると違った見方があるでしょう。

この現象は、霞ヶ浦北浦のあるべき姿を考える、ひとつの題材と言えるのではないのでしょうか。（担当：湖沼部）

……トピックス……あめりかなまず……

霞ヶ浦において増加傾向にある、アメリカナマズについて調査を行っています。現在、平成12年生まれの2歳魚が多く生息しています。3歳以上になると産卵を始めますので、今後の動向が心配されます。本種の産卵生態については、まだよく分かっておりません。産卵に関する情報がありましたら、当内水試までお知らせ下さい。

（担当：湖沼部）

利根川・涸沼の3漁協 ヤマトシジミ種苗生産試験を実施

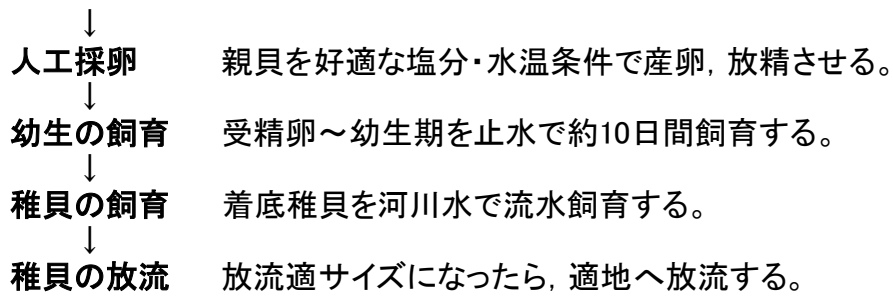


茨城県のヤマトシジミ産地である利根川と涸沼では、生息環境の悪化等によりシジミ資源が減少し、漁家経営が厳しい状況にあります。平成12年に新たなシジミ増殖策の一つとして、波崎共栄漁協が本県で初めて種苗生産試験に取り組み、一定の成果が得られました。漁業者主体のシジミの種苗生産は全国でも珍しい例です。平成13年からは同漁協の他、常陸川漁協、大涸沼漁協においても試験に取り組み、内水試と水試経営普及室が指導にあたっていますが、今年の経過を紹介します。

1. 種苗生産試験の手順

ヤマトシジミの種苗生産試験は、以下のような手順で行われています。

親貝の用意 成熟した親貝を用意し、冷暗処理をする。



2. 各漁協の取り組み

(1) 波崎共栄漁協(利根川)

7月下旬，漁獲した親貝と内水試で淡水畜養していた親貝を用い人工採卵を行いました。とても良く産卵し，10日後には約1,080万個の着底稚貝が得られました。その後の飼育で数はやや減少しましたが，10月下旬に，殻長0.3～5mmに成長した稚貝約600万個を利根川に放流しました。残り約70万個の稚貝は，来年まで飼育する予定です。

(2) 常陸川漁協(利根川)

春から陸上のビニールハウスで親貝を加温蓄養することにより成熟期を早め，6月下旬に採卵することができ，約720万個の着底稚貝を得ることができました。1ヶ月後には約320万個に減少しましたが，早期採卵のため成長が良く，10月下旬に殻長0.5～15mmに成長した稚貝を放流しました。

8月下旬にも2回目の人工採卵を行い，着底稚貝で約1,390万個，1ヶ月後の稚貝で約600万個となり，現在も飼育中です。

(3) 大湫沼漁協(湫沼・湫沼川)

アユ畜養施設をシジミ種苗生産用に改修し，7月上旬と8月下旬の2回人工採卵を行いました。1回目の採卵では，着底稚貝で約510万個，1ヶ月後の稚貝で約400万個得られ，2回目の採卵では着底稚貝で約200万個，1ヶ月後の稚貝で約70万個が得られました。11月中旬に放流を予定しています。

3. シジミ種苗生産の意義

- ・不安定な産卵～初期稚貝期を陸上水槽の好適条件で補える。
- ・地元のヤマトシジミ資源を増やせる。
- ・生態を理解し、資源管理意識が高まる。



親貝の産卵・放精



ヤマトシジミ人工採卵の様子(常陸川漁協)

(担当:河川部)